

地球の木

♥ 地球上のすべての人たちと共に生きたい

CONTENTS

■設立25年、未来に向けて	1
■広げよう!! 幸せ分かち合いの輪	2
■ありがとう、分かち合いの心で25年	3~4
■支援地から ネパール	5
■支援地から ラオス	6
■支援地から カンボジア	7
■活動日誌	7
■気仙沼だより	8
■イベント情報	8

設立25年、未来に向けて

—かながわと共に、アジアと共に—

あなたにとって「地球の木」とは？ 1997年に行ったアンケート調査には、会員からのキーワードがたくさん書かれています。「第三世界とつなぐパイプ、共存の世界への窓口、社会参加、市民レベルの外交、安易な暮らしの戒め、ささやかなボランティア」など。当時の会員の気持ちが表現されています。

地球の木がグローバル市民基金として産声をあげたのは、1991年7月3日でした。当初の会員数は約1,000人、神奈川県では会員が多いNGOでした。多国籍企業や日本のODAがもたらした環境破壊や人権の抑圧に対して、国による外交だけではなく、市民と市民がつながり、地域と地域の連帯を強めること。そして、豊かな地球を作っていく暮らし方を考えいくことを目指していました。熱気がこもった総会であったことが想像できます。

設立総会には、長洲一二県知事が、応援に駆けつけてくれました。人類の存続を危うくしている「核」の脅威を語り、互いを認め合う<共生>こそが生きるための最良の道であると述べられました。さらに、日本のODAに対し、市民による地域発の国際協力の必要性を述べられました。1975～1995年まで神奈川県知事を務めた長洲氏は、市民と市民がつながることで理解が広まり、世界平和の実現に貢献できるという「民際外交」を提唱し、国内に向けては、「内なる国際化」を推進しました。

このような時代に生まれた地球の木は、県の活動にも積極

的に関わり、たくさんの会員に支えられ、アジアでの国際協力や国内での出前講座や学習会などを行ってきました。その活動が認められ、この3月にはかながわボランタリー活動推進基金21の「ボランタリー活動奨励賞」を受賞しました。これまで地球の木の活動に時間と労力を注いでくださった方々と共にこの受賞を喜びたいと思います。

さて今、世界の状況は大きく変化しています。グローバルな経済が貧富の差をますます拡大させ、紛争が多発しています。大規模な自然災害や気候変動への対応が世界共通の課題となっています。国内では、安全保障関連法案が国会で強行採決され、報道が規制され、市民の声がかき消されようとしています。

東日本大震災の復興もままならないまま、熊本で大地震が起きました。次の世代に安心して暮らせる社会を残していくことでしょうか。このような社会状況の中で、

地球の木はどんな役割を果たせるでしょうか。地球の木が策定した3ヵ年計画の基本方針(2016-2018)では、「相互自立」に基づく地球の木らしい国際協力活動の推進と、安保法制やTPPなど特定の課題に特化したネットワークと連携し、政策提言に力を入れることを明記しています。また、こうした活動を担う未来の支援者の参加を積極的に促していくことにも言及しています。

25年目の地球の木では、バラエティに富む記念イベントを企画しています。さて、あなたにとって「地球の木」とは？

(理事長 丸谷士都子)

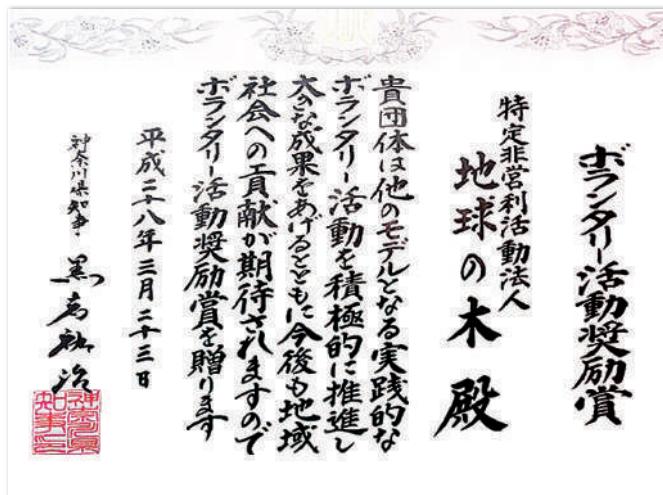


まつりはボランティア大活躍の場
(5/14・15 あーすフェスタかながわにて)

広げよう !! 幸せ分かち合いの輪

地球の木は、平成27年度ボランタリー活動奨励賞を受賞しました。この賞は神奈川県が設置した基金事業「かながわボランタリー活動推進基金21」の一環で、ボランティア活動団体の間では「ビッグ賞」と称される晴れがましい栄誉です。

表彰・授与式はさる3月23日、県立かながわ県民活動サポートセンターで行われました。県の説明によると、この賞は平成13年(2001年)度からスタートし、これまでに627団体からの推薦応募があり、このうち66団体4個人が受賞しています。今年度は19団体が推薦・選考され、地球の木を含む5団体が受賞しました。表彰対象の内容は、表彰状に記されている通りです。



表彰式では吉川副知事から丸谷理事長に表彰状・副賞が贈られました。その後、選考委員からは、「共通する点は女性たちが核になっていて、しかもモデル性、自主・先取性があり、また他の団体と連携するなどネットワークのつながりも活発。今後も活動を展開していくのは大変だろうが、受賞した団体はいずれも創意工夫し、実績をあげているので他の団体のモデルになることを期待します」との選考の報告がありました。

推薦応募の理由として提出した文は次の通りです

地球の木は「グローバル市民基金 地球の木」として1991年に設立されました。その目的は、日本と歴史的にも経済的にも深いつながりがあるアジアの国々について日本の市民がより理解を深め、不公正な世界の仕組みを見直し、生活から変えていくことでした。

当時、神奈川県内の国際協力団体は少なく、また、支援するだけでなく、自分たちの生活とのつながりを考え、変えていこうと言う活動は先駆的な試みであったと言います。

■「海外支援」

設立以来24年間、フィリピン・ラオス・カンボジア・ネパールなどの国々で困難な状況にある人たちへの教育や人材育成などの支援を行い、各地域の状況と

その課題を県民に伝える活動を行いました。

■「地球市民教育」

学校や地域で出前講座を行ったり、一般の人たちも参加できる学習会を行い、アジアの国々の現状について学ぶ機会を作りました。中学や高校でオリジナル教材「マジカルバナナ」、ネパールでの識字教育を扱った「タルー族の家族ゲーム」、「ラオスの森の暮らし」などのワークショップを実施した結果、若い世代の国際教育への関心を高める事ができるようになりました。

2014年より、カンボジアの家庭内暴力やレイプの被害者のためのシェルターの支援を開始しました。さまざまなテーマを扱いながらアジアの課題をより多くの県民と共有していきたいと願っています。

NPO法人化に尽力 佐藤慶子さん

設立以来の会員。地球の木は2000年にNPO法人になりましたが、その下準備に尽力してくれたのが佐藤さん。その後気仙沼のTree Seedが法人になる時にもお世話になりました。地球の木が、多くの人に支えられ社会的信用も得、しっかりした木に育っていく節目に大いに助けてもらいました。とても気持ちのいい方で「私も地球の木へのお手伝いがきっかけで、行政書士としての仕事が開けていきました。それでは資格を持っていただけだったのよ」と明るく笑う。そして今も、佐藤さんは、登記に関しての心強い相談役であり、いわば縁の下の力持ちです。「命の恩人みたいな人よ」と事務局長。地球の木の財産のような仲間の一人です。



事務所のオーナー 稲垣薬品興業株式会社

25年前の設立時から10年余り地球の木の事務所があったのは、新横浜。いくつかの団体が使う共同事務所だったので、狭くてみんなで右往左往していたのを覚えています。そこを脱出して今の事務所に移ったのは2002年9月です。関内駅から徒歩1分という立地条件の良さ、そして自分たちだけの場所が持てたことに大喜びしました。私たちの希望を叶えてくれたのは、地球の木の活動をよく理解し、この事務所を割安で貸してくださる稻垣薬品興業株式会社という化学薬品を取り扱う会社です。明治20年創業という横浜でも歴史あるこの会社の前社長、木本秀一氏が、地球の木の元理事の一人Nさんと小学校の同期生だったことからのご縁でした。とても悲しいことに木本氏は昨年病でお亡くなりになりましたが、その後も変わらず稻垣薬品さんにはお世話になっています。



バナナケーキ生みの親 佐々木慧子さん

バナナケーキ！地球の木のイベントや集会に、定番のこのケーキが必ず並びます。そのバナナケーキを20年以上前から作ってくれるのが設立当時からの会員、佐々木慧子さんです。フェアトレードのバランゴンバナで作ったほどよい甘さと焼き具合が人気の秘密です。イベントで販売すれば、すぐ無

くなってしまいます。総会の後のティータイムや、地球の木カフェ等で場を和ませて、会話を弾ませてくれるケーキです。得意な運転でも力を発揮し、どこのイベント会場へでもグッズの搬送を気軽に引き受けてくれます。道路地図を見るのが大好きな、頼りになる会員です。

たくさんの人たちに支えられて地球の木は25周年を迎えました。本当に多くの方たちの顔が思い浮かびます。そこで取材できただけではなく、一部の方たちを紹介します。（会報作成チーム）

ありがとう、分かち合いの心で25年

7年前のことでした。地球の木にシニア・インターとして派遣された山本さん。「自分らしく地球の木に貢献できることはないか」と真剣に模索していた姿が印象的でした。定年退職前から地域の仲間たちと始めていた野菜や米作り。地球にやさしい、持続可能な暮らしをめざす地球の木の活動と重なる部分がある！と相模原の畑見学を企画してくれたのがきっかけで、「国内スタディツアー」が始まりました。その後、仲間も引き入れて雑木林の散策、自然エネルギーを取り入れた暮らし見学、信州・甲斐での「農的暮らしを訪ねる旅」、昨年のトランジション藤野訪問と、毎年ツアーの企画・実施に尽力してくれました。このツアーのすごいところは、地球にやさしい、持続可能な暮らしの大切さを肌で感じた参加者たちが暮らし方を変え、ベランダや庭で野菜作りを始めたり、畑を借りて農業を始めたりしたことです！麦や蕎麦づくり、養蜂と山本さんの活動は止まることを知りません。地球の木があ祭で売るチヂミの粉は相模原産の安全な粉。次はどう貢献しようか…といつも考えてくる山本さん。地球の木の知恵袋です。



国内ツアーの知恵袋 山本正俊さん

7年前のことでした。地球の木にシニア・インターとして派遣された山本さん。「自分らしく地球の木に貢献できることはないか」と真剣に模索していた姿が印象的でした。定年退職前から地域の仲間たちと始めていた野菜や米作り。地球にやさしい、持続可能な暮らしをめざす地球の木の活動と重なる部分がある！と相模原の畑見学を企画してくれたのがきっかけで、「国内スタディツアー」が始まりました。その後、仲間も引き入れて雑木林の散策、自然エネルギーを取り入れた暮らし見学、信州・甲斐での「農的暮らしを訪ねる旅」、昨年のトランジション藤野訪問と、毎年ツアーの企画・実施に尽力してくれました。このツアーのすごいところは、地球にやさしい、持続可能な暮らしの大切さを肌で感じた参加者たちが暮らし方を変え、ベランダや庭で野菜作りを始めたり、畑を借りて農業を始めたりしたことです！麦や蕎麦づくり、養蜂と山本さんの活動は止まることを知りません。地球の木があ祭で売るチヂミの粉は相模原産の安全な粉。次はどう貢献しようか…といつも考えてくる山本さん。地球の木の知恵袋です。

海外で織物・染色指導 大藪明恵さん

「大藪さんの専門は？」

と言われると、どちらか答えたらいいか迷ってしまう。織物・染色・金継ぎ…。アジアの古布の収集家でもある。専門性を持った会員、大藪さんの協力で地球の木の「幸せ分かち合いクラフト」はどんなに進化したことか。カンボジアに足繁く通い、ああらかな心と温かい言葉で、タケオの職業訓練センターの生徒たちに織物や染色、縫製の指導をして下さいました。ある時、生徒たちに「自由に織つてね」と言ったらとてもユニークな作品が出来上がりしました。さすが織物の村に生まれ育った少女たち！その潜在能力に驚いた、と大藪さん。



地球の木発の日韓交流 滝口みちさん



去年まで常勤の高校の英語の教師でしたが、退職したのを機に地球の木のボランティアに手を挙げてくれました。その一つが会報誌発送のお手伝いでした。封筒の中に会報誌と各チームの情報、イベントお知らせ等のチラシ4~5枚を

セットにするので、結構手間がかかります。おしゃべりをしながらの作業を楽しんで毎回参加してくれます。また去年、山下公園で開かれた東日本大震災・復興支援まつりにもボランティアでグッズの販売等を担当し、会場を訪れた外国人を得意の英語で案内していました。2006年地球の木が、地球市民教育を実践している韓国の女性グループと交流した折、ホームステイを引き受けた女性と仲良しになり、家族ぐるみのお付き合いをしているそうです。地球の木から始まった日韓交流、素敵なことです。

もったいないキャンペーン 片平奈美さん

昨年の「もったいないキャンペーン」では、多くの方にご協力いただきたくさんのお品物が集まりました。集まった切手やハガキの整理は、たいへん細かな作業で時間もかかりますが、会員歴20年になる片平さんが活躍してくれました。以前地球の木が行っていたカンボジアの子どもの支援では、里親にもなってくれていました。時間を見つけて、タイミングよくボランティアに参加してくれる会員さんです。



グロフェス・チヂミ販売 半田崇史さん



国内最大級の国際協力イベント「グローバルフェスタ」(通称グロフェス)は毎年秋東京で開かれ、地球の木もグッズとチヂミの販売でずっと参加しています。グロフェスは2日間に渡って行われるので、お手伝いの人も多く必要なのですが、この時に、住んでいる宇都宮から来てくれるのが半田さんです。どうしたら売れるのか一生懸命考え、元気に呼び込みをしてくれる姿に、チヂミを焼く方も「がんばろ

ありがとう、分かち合いの心で25年

う」と励まされます。会場に来る学生さんに、「ボランティアとは……」と語る姿が今年も見られるに違いありません。

イベントで写真撮影 石北正道さん



趣味のカメラの腕を生かして、地球の木の様々なイベントで記録のための写真撮影をしてくれています。専門は土木関係で、お役所で長年仕事をされていました。その頃から

時々事務所に立ち寄って下さるのですが、石北さんのお顔を見ると、地球の木を気にかけ応援してくれる気持ちが私たちに伝わります。地球の木の、物品援助ではない海外支援の在り方に共鳴し、期待を寄せてくれている会員さんです。イベントの会場でカメラを構えた石北さんの姿を見つけてください。

野菜販売でチャリティ 祐徳洋平さん

支援地それぞれの状況を考えた支援を行っているという点で、地球の木の活動に共感を寄せる祐徳洋平さん。自身も地域の人々との交流



を大事にし、地域に根付いた会社運営を行う若き起業家。毎月末にやさしい笑顔を事務所にのぞかせ寄付を届けてくれます。横須賀市内の某所で毎月1回チャリティイベントとして、自ら野菜販売を行う。良心的な価格の野菜は地元の人にも喜ばれ、あっという間に売り切れてしまうには驚きました。その売上金を地球の木に寄付してくれています。

ブティックに地球の木バッグ RAPALLOさん



神奈川県府近くのおしゃれな店に足を踏み入れると入り口のすぐ横に見たことのあるカンボジアのバッグが…。会員Sさんの紹介で地球の木の「幸せ分かち合いクラフト」を置いてくれています。「よく売れるんですよ」と高村さん。



作文コンテストの参加者たち。題は「大地震がもたらした子どもの教育への影響」

大地震を乗り越えて

「幸せ分かち合いムーブメント」の始まりと推移

ネパール極西部での教育支援活動の中で出会った、開発の専門家カマル・フヤルさんから、自身が事務局長を務めるNGO SAGUNと地球の木の考え方がとても似ているので一緒にやりませんか、という申し出を受けたのは2005年のことでした。現地調査の後、2007年に支援を始めてから今年で10年。東部コシ地域での、高校を拠点とした「幸せ分かち合いムーブメント」は、毎年の現地訪問やスタディツアー、現地スタッフの招聘プログラムなどの交流を通じて互いに理解を深め、豊かな人間関係を築いてきました。

毎年選ばれる11、12年生各8名の奨学生は、「奨学制度がなかったら、進学はありえなかった」と口々に感謝の意を述べてくれます。卒業すると小学校や母親教室で教えるなど地域に貢献しています。

貧困家庭への収入創出プログラムは、農家に5,000ルピー（1ルピーは約1円）を1年間、計10家庭に貸し付け、返ってきたお金を次のグループに回すというやり方で運用していますが、資金がうまく循環するようになり、新たなシードマネー（元手となる資金）を支援しなくても地域で回していくようになりました。

次のステップとして、エコツーリズムを中心とした新しい計画を立てようとしていた矢先の2015年4月、大地震が支援地の村々を襲いました。

被災者支援に力を入れる

ネパール大地震は、家屋だけでなく、地域にある学校にも大きな被害をもたらしました。地域にある9校のうち8校が使えなくなってしまったのです。地球の木は、SAGUNとの話し合いの結果、第3次

被災者支援として、2つの小学校に補助教室（ラーニングセンター）を建設することにしました。インド国境封鎖による燃料・資材不足で着工の遅れが懸念されましたが、幸い、状況が改善し、4月中旬着工、雨季が終わる前に完成との知らせがカマルさんから入りました。建設地は、パンチ地区のチャトレビ・パル小学校とサレニ地区のブメスタン小学校。生徒たちの笑顔が楽しみですね。

朗報も

地球の木が通常行っているプログラムは、大地震の支援を優先したため、後回しになったり、できないものもありましたが、校外研修と作文コンテストが実施されたとの朗報が入りました。校外研修には11、12年生87名が参加。カトマンズの博物館や動物園を見学したそうです。地震のトラウマに苦しめられる生徒にとって、校外研修はきっと待ち遠しい行事だったことでしょう。

また、4月6日に行われた作文コンテストには、地域の3校から19名（女子11名、男子8名）の参加があり、作文の題は「大地震がもたらした子どもの教育への影響」。会場で題が発表されます。地球の木が奨学生支援を行っているシリ・マンガル・ジャナ・ビジヤヤ高校のスジヤン・ラマ君が最優秀賞を獲得。いつも優勝者の作文が季刊誌「ロシラハール」に掲載されます。季刊誌の発行が楽しみです。

新しい動きが…

先日のネパールからの報告に、目を見張るような進展がありました。ピンタリ地域の農業協同組合が、トラクターを購入したというのです！ニンニク芽の栽培がうまくいって、たくさん収入を得たので、次は大型トラクターを買う予定だそうです。ラジャバース地区ではヤギの飼育も始まります。

（ネパールチーム 乳井京子）

農村における魚保護と 「ジェンダー問題」

皆さん、こんにちは。今回は、我々が今“新たに”取り組んでいるジェンダー問題についてお伝えします。“新たに”取り組んでいるなどと申し上げたら、皆さんにお叱りを受けてしまうかも知れません。しかし、ジェンダーの意識啓発そのものを目的としたプロジェクトでない限り、多くのプロジェクトにおいてジェンダーは公平性、効率性などとともに「配慮すべきこと」の一つとされるものの、常に常に強く意識されてはいないというのが実際かと思います。また、JVCラオスでは伝統的な村の意思決定機関を尊重して活動を進めています。その場合女性の関与は少なくなりがちで、特に少数民族の村ではその傾向があります。

今回、あるドナー(活動資金支援団体)からジェンダー配慮を条件に「魚保護地区の設置活動」(*)に助成を受けました。村では成人男性は投網をする一方、年配の方や小さい子どもを含めた女性たちもまた別の道具で魚を獲ります。市場に魚を売りに行くのも、男性もしますが、女性の仕事の一つでもあります。そのような中で、魚保護地区の活動が女性たちの参画なしに進められたらどうなるでしょう。知らないところで決められた規則をそうとは知らずに破り、罰がくだされる。これでは活動が続かないでしょう。このような状況に鑑み、ジェンダー研修などを実行して女性の魚保護地区活動への参加を推進しています。

もちろん、村の女性が一足飛びに「女性の権利のために立ち上がりよう!」となるわけではありませんし、そうなったら男性の反発を招いて活動は立ち行かないでしょう。安易に妥協するわけではありませんが、ラオスの農村部の状況の中でできるところ



魚保護地区の規則を書いた看板の前の村人たち

から変えていくのが現実的ですし、それが今後少しづつ変わっていく基盤になるでしょう。例えば、JVCの郡事務所で2日間のジェンダー研修を行った際、少数民族の村では女性の外泊は難しいということで、事務所近くに宿泊せず、村に送り翌日また迎えに行きました。逆に言うと、夜帰ってくるのであればジェンダー研修に出ることは問題ない、ということです。

今回ジェンダー問題に特に注力するようになったのは、ドナーからの条件でしたが、他の活動でもスタッフが「女性の参加が」と口にすることが増えました。今後このジェンダーの視点がより自分たちのものになっていく手応えがあります。地球の木の皆さんにはいわゆる「ドナー」というより、ともに市民活動を行う仲間ですが、叱咤激励やご意見をいただき、ともにより良いラオス事業にしていければと思いますので、宜しくお願ひいたします。

(JVCラオス事務所 現地代表 平野将人)

*魚保護地区の設置活動: 村人自身による自然資源の管理活動の一つ。禁漁の場所と、そこで漁をした場合の罰則を定め、自然資源(魚)を増やす活動。

愛川町のラオス文化センターへ行ってみませんか?

地球の木は25周年記念事業の1つとして、今秋11月に神奈川県愛川町にあるNPO法人在日ラオス協会(在日ラオス文化センター)の訪問ツアーを計画しています。地球の木が活動目標として定める多文化共生の実態を学ぶとともに、幸せ分かち合い運動の実践を兼ねた国内スタディツアードです。地球の木は国際活動・支援の一環としてラオスチームを組織し、日本国際ボランティアセンター(JVC)を通してラオスを支援しています。

4月24日、下見を兼ねてラオスのお正月「ピーマイ」に参加してきました。同センターは寄付金など淨財で2003年にオープン。2013年にはNPO法人になり、語学教室や難民ら在日ラオス人の生活相談など多彩な活動の場となっています。

ツアーは、仏教徒国の大祭「タートルアン祭り」が同センターで開催される日を予定しています。当日は本国からのラオス僧による式典と、在日ラオスの人たちによる伝統の民族舞

踊を見学し、さらにラオス郷土料理なども楽しむ交流を図ります。

詳細は次号でお知らせします。



民族舞踊を披露する在日ラオスの子どもたち



社会復帰の道に支援を CWCC(カンボジア女性緊急救済センター)

地球の木が支援しているCWCC(*)のプノンペン保護シェルターには、常時15名ほどが入居しています。スタッフThiraさんの説明によると、こどもを複数連れて来ている場合や、被害者自身が幼いために母親などが一緒に入居しているケースなども含まれるので、実際の入居者数は30名ほどだそうです(2016年1月26日現在)。

日本でもそうですが、シェルターの所在地は明らかにできないために、CWCCが迎えに来てくれた車でシェルターに行くことになります。被害者たちは社会へ復帰することが目的なので、1年以上に渡って滞在することではなく、入居者は7~10カ月で入れ替っていきます。そのため、前回訪問時(昨年7月)に会った人たちは一人もいませんでした。

このシェルターで法的サポート、身体と心のケア、自立のためのトレーニングを受け、社会へと復帰していくのです。体の不調を訴える人にはクリニックと連携しての治療が行われ、トラウマを抱える人たちは、専門家によるカウンセリングやセラピーが行われます。特にカウンセリングはとても重要であり、1対1のカウンセリングとグループで受けるカウンセリングの二通りあって、「1人ではない」という状況を作り、入居者同士で励まし合い、助け合っていくことができるようになっているということでした。

心と体の傷を十分いやしたうえで、生活力をつけることも重要です。シェルター内では、裁縫、小物製作、カフェやクッキングなどのトレーニングを受けることができます。そしてシェルターを出た後、どうやって生計を立てていくのか、スタッフと相談し、アドバイスを受けながら、その後の準備を進めていくのです。

経済的に困難な状況の人たちには、新しい生活を始めるための支度金を支給したり、小規模な事業を始めるための支援も行っています。「事業」といっても農村地域では、養鶏や野菜売りなど、プノンペンなど都市部では、ミシン1台の仕立て屋や、移動



縫製のトレーニングを受ける



シェルターに入居中の女性たち

できる果物屋台などのことです。何より大切なのは、彼女たちがシェルターで、自分たちの権利について知り、そして自信と誇りを取り戻すことでしょう。

地球の木では、2016年度、CWCCプノンペンシェルターの入居者たちが社会復帰していくためのトレーニング、支度金などに支援を行っていきます。皆さまのご支援・ご協力をどうぞよろしくお願いいたします。(理事 筒井由紀子)

*家庭内暴力や集団レイプなどの被害にあった女性たちのための保護シェルター

子ども服を集めています!

春夏物の



シェルターに入居している子どもたちの服を集めています。入居者は、身の回りのわずかな持ち物しか持たずしてシェルターに来ます。入れ替わりも多いため、着がえの服、特に子どもたちの服が必要です。子ども服は男女問いませんが、なるべく新品に近いものを事務局まで送ってください。お願いします。

活動日誌(3月~5月 抜粋)

3月

- 17日 第8回理事会
- 23日 ボランタリー活動奨励賞授賞式
- 26・27日 「教材フェスタ2016」教材展示販売(JICA横浜)

4月

- 6日 第9回理事会
- 18日 第10回理事会
- 26日 監査

5月

- 7日 出前講座(横浜市立平楽中学校)
- 10・11日 デポー展示会(緑園)
- 14・15日 「あーすフェスタかながわ2016」出店
- 16日 第11回理事会
- 29日 第17回地球の木総会



震災から5年がたって

震災から5年、
やっと気仙沼市
も復興の兆しが見え始めました。

仮設住宅から、復興住宅への移転も一部始まり、今年度中には多くの方が復興住宅に移動になると思います。今後は、学校の校庭からも仮設住宅が撤去されていき、子どもたちの笑顔が戻り、仮設住宅から定住する場所ができ、やっと安心して生活できる環境になればと思っています。

ただ、海岸沿いではまだ、津波の傷跡は多く残っており、地盤沈下による嵩上げや、堤防の建設などが行われている状況です。堤防については、残念ながら私たち

の生活の一部である海が見えないほど高いものが建設されている状況で、寂しくもありますが、安全のため、もう決まったこと、だんだん割り切れてきました。

これから、気仙沼市は、仮設住宅から復興住宅への移転。仮設商店街から新しい店舗への移転など、人々の流れが変わり、コミュニティが変わります。今度は、新しい流れやコミュニティについていけなくなる人々が出てくることも予想されます。

私たちTree Seedは、今後の新しいコミュニティを老若男女分け隔てなく支えられる活動を行い、また、気仙沼市の現状を多くの人たちに届けられるように、リアルな



海沿いの堤防「商港岸壁」

情報を発信していかなければと思います。

熊本県を震源とした地震の被害にあわれた皆さんにあ見舞い申し上げるとともに、私たちも気仙沼市から応援しています。
(Tree Seed 小野寺大志)

INFORMATION

★地球の木のプログラムは、皆さまの会費と寄付で支えられています



9月のカマルさん招聘では、滞在中のホームステイとアテンドに協力してくださる方を募っています。
ご協力いただける方は、事務局までお問い合わせください。

デポー展示会：6月11日（土）東戸塚デポー

新しい寄付プログラムが始まりました

①毎日のクリックで募金

地球の木はインターネットでクリック募金ができる“gooddo（グッドドウ）”に参加しています。毎日1回、gooddo内の地球の木のページにアクセスし、「応援する」をクリックしていただくことでポイントが付与されます。週間のポイント総数に応じて寄付される仕組みです。スマートフォンからでも参加いただけます。皆さまのご協力をお願いいたします。<http://gooddo.jp/gd/group/chikyunoki>

②使用済みメイクアップ容器を集めて募金

地球の木はテラサイクルが行う使用済みメイクアップ容器の回収・リサイクルプログラムに参加しています。このプログラムでは、回収量に応じてポイントが付与され、ポイントは地球の木への寄付金に換えられる仕組みです。詳しくは同封のチラシをご覧ください。

25周年記念事業を始めます

設立25周年を迎えた地球の木は、5月の総会後の清水俊弘氏（地球の木顧問）の講演を皮切りに、記念事業として本年度いくつかのイベントを行う予定です。
(25周年実行委員会)

◆ラオスお話会

7月3日（日）14:00～15:30

場所：めーぷるキッズ

横浜市都筑区中川中央1-39-37 ガネーシャ101

※詳しくは同封のチラシをご覧ください。

◆お話＆ワークショップ「アクティブ・ラーニング： 社会参画をめざす参加型学習」

9月22日（木）

講師：カマル・フヤルさん

場所：アートスクエア木月

※詳しくは次号でお知らせします。

◆「地球の木講座：ネパールのコミュニティ づくりに学ぶ」

9月25日（日）

講師：カマル・フヤルさん

場所：鶴見国際交流ラウンジ

※詳しくは次号でお知らせします。

昨年の総会で承認された定款の変更が2016年4月28日に横浜市より認証されました。定款は地球の木ホームページからダウンロードできます。



特定非営利活動法人
地球の木



「今回の特集の人選は大変だったね」「あの人もこの人も出したい人まだまだいるよ」「第2弾をいつかやれるといいね」現在6名いる会報作成チームのメンバーは迷走しつつも丸一日設立25年目の会報編集作業に没頭。「私はガリ版で新聞作ってたよ」「そうそう私も」「半世紀前の話だよね」…と年代が分かる息抜きのおしゃべりの隣で、若いSさんが黙々とパソコンに原稿の修正箇所を入力していく。今号も何とかまとまりそう、みんな少しホッとして家路についた。
(Y.N)